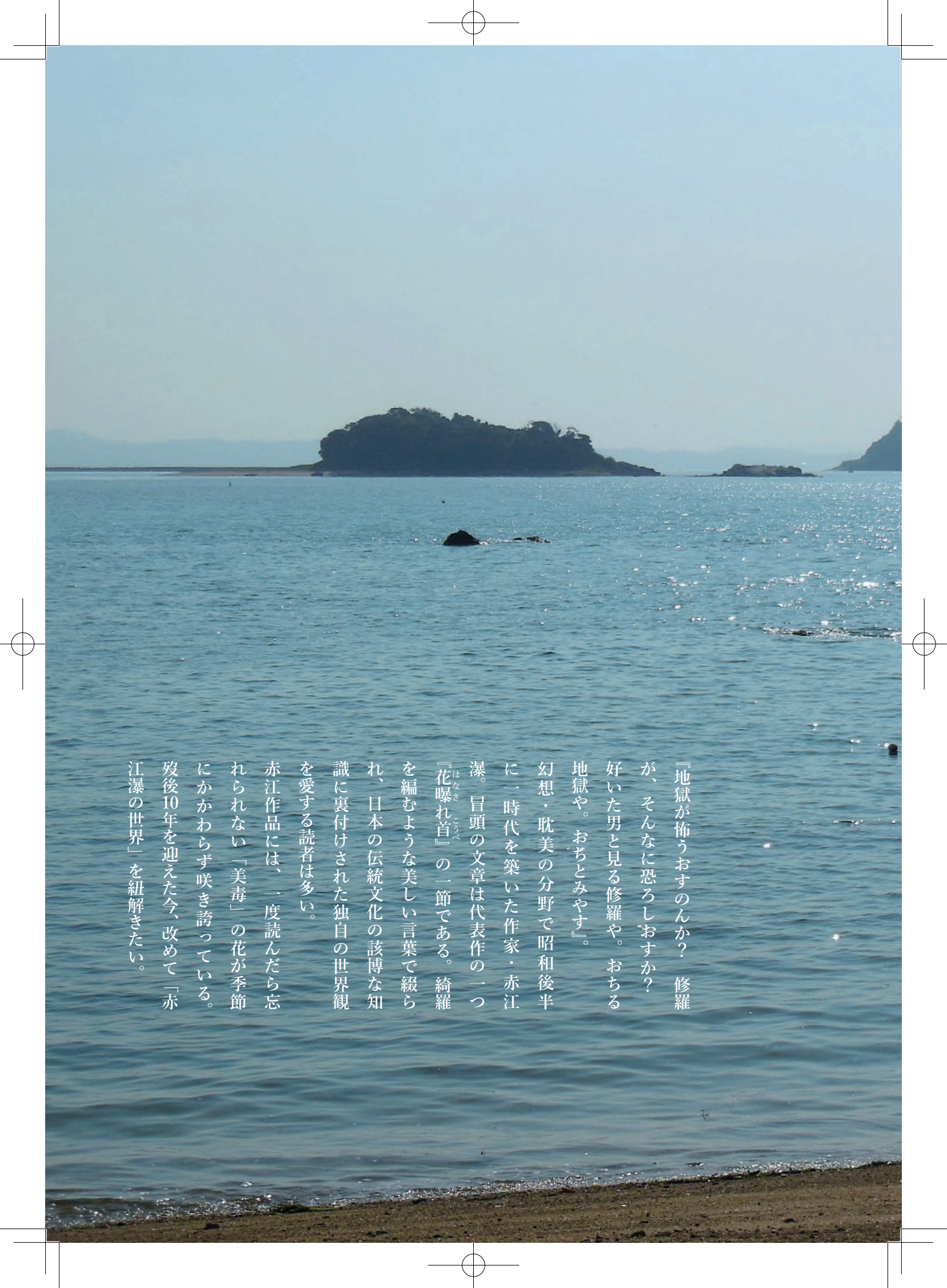




『地獄が怖うおすのんか？ 修羅
が、そんなに恐ろしおすか？
好いた男と見る修羅や。おちる
地獄や。おちとみやす』。

幻想・耽美の分野で昭和後半
に一時代を築いた作家・赤江
瀑。冒頭の文章は代表作の一つ
『花曝^{はなばく}れ首^{こしらへ}』の一節である。綺羅
を編むような美しい言葉で綴ら
れ、日本の伝統文化の該博な知
識に裏付けされた独自の世界観
を愛する読者は多い。

赤江作品には、一度読んだら忘
れられない「美毒」の花が季節
にかかわらず咲き誇っている。
歿後10年を迎えた今、改めて「赤
江瀑の世界」を紐解きたい。

赤江 瀑 の 世界

— 歿後10年 —

美毒の 人

中村義裕



(角川書店 / AD: 石岡瑛子 撮影: 沢渡 潤)

その世界観

赤江瀑（1933～2012）は、日本文学の系譜の中で、作風や扱うテーマから「耽美・幻想」の範疇で語られることが多い。否定はしないが、それだけではないのも事実だ。こうした文学や作家の系譜は、明治期の泉鏡花に始まり、谷崎潤一郎、三島由紀夫などを経て、赤江に至る水脈を形成している。むろん、誰もが耽美・幻想ばかりを書いていたわけではなく、他にも優れた作品は多い。当然、赤江も「耽美・幻想」の枠には収まらない作品を多数遺しているが、量が圧倒的に多いことから、そう分類されるのだろう。しかし、「純文学」の規定さえ定かとは言えない時代に、文学の分類に意味があるとも思えない。

赤江は、特に「短編小説」に優れた持ち味を発揮する。着眼点の鋭さ、余韻の残響、鮮烈な断章などは見事な職人芸だ。短編は特に鋭い切れ味を求められ、「短いから簡単」というものではない。それに加え、膨大な量、テーマの広さと深さに「凄み」さえ漂わせている。長編では、1974年に調香師の世界を描いた『オイディプスの刃』で「第1回角川小説賞」を受賞、角川春樹事務所で映画化もされている。2000年には泉鏡花の『天守物語』を意識したと思われる『星踊る綺羅の鳴く川』を著すなど、豊饒なるテーマの持ち主だ。

「LGBT」などの思考の広がりや、今はずいぶん垣根が低くなった性愛をテーマにした作品から「耽美」

などの分野で語られるのだろうが、それは一部に過ぎない。歌舞伎、能、人形浄瑠璃、舞踊、演劇、美術、骨董、バレエ、造園、香道、茶道、調香、錦鯉、陶芸、剣道、民間伝承……。広範囲にわたる日本の伝統や文化の優れたテーマのもとで展開される人間模様には、赤江の「宇宙」が存在する。

テーマの広さに加え、多くの伝統文化の集積地「京都」、生誕の地で終生離れなかった「下関」を中心に「山陰・山陽」を舞台とした作品が多いのも特色だ。地域に息づく伝統や慣習を取り入れて物語を紡ぐ。それには、ストーリーやドラマ性に加え、その土地の「ことば」である方言が欠かせない。

赤江の「ことば」は、真似られるものではない。私事にわたるが、『花曝れ首』に出会い衝撃を受けたのは高校生の時だった。以来、その「美毒」の世界にのめり込み、物書きという職業柄、個人的な付き合いの中で、真似事にもならないような原稿を送りしことがある。しばらくして、特徴のある文字で長文の返信が届いた。「私の世界など目標になさることはありません。中村さんの勝手気ままに書かれることが大事です。他人に似ぬこと、他人に似せられぬこと、これが大切です。くれぐれも、あなた一人の世界で、ほかに通い似る人一人もなしという道を選ばれることこそ肝要かと思います。書くべく価値のある小説を書いて下さい。未踏の大地こそ晴れて建立の意味があるのです」と、無鉄砲な若輩を諭す、慈愛に満ちた、温かくも厳しい言葉が並ん

赤江瀑
— 歿後10年 —
美毒の人の世界



「幻は、生きて躍ってこそ幻」。雄渾な筆跡が言葉に命を吹き込む

でいた。私信ではあるが、この部分だけでも、赤江瀑の「覚悟」と「孤独」が突き刺さる。

赤江瀑という人

赤江瀑。1933年に山口県・下関市で生まれ、高校を卒業後上京、映画監督の溝口健二（1898～1956）に憧れ、日本大学藝術学部に入學。映像作家を目指しながら詩作に励むが、集団で製作する「映像」よりも個人で行う創作活動に興味に移り、大学を中退。その翌年、師事を目指していた溝口の死は、赤江の進むべき道を大きく変えた。58年、25歳でNHKのラジオドラマの脚本募集に入賞、放送作家の道を歩み始めた。68年には、毎日新聞社主催の「明治百年記念懸賞演劇脚本」に応募した歌舞伎『大内殿おうちどの』

1970年代後半から80年代だろうか。
下関の自宅付近と思われる
（講談社／撮影：斎藤和欣）



1990 年代終わり頃のもの。消印がないので、著書などに添えられていたのだろう。「自分の世界観を持つ」との励ましが綴られている



日々、激しく流れる関門海峡を眺めながら妖かしの美を紡いでいたのだろうか

『やみじ 闇路』の評価が高く、小説家として歩む決意を固める。

柔らかな人当たりや物腰からは想像も付かない、「美への眼」をゆるがせにしない厳しさが、完成度の高い作品群につながり、赤江瀑の魅力を、この険峻な山脈の中から磨き抜いた鮮烈な厳しさに見ることができる。

インタビューの中で、ペンネーム「瀑」の由来を、自分にはない「激しさ」の象徴だと語っている。これは私見だが、「瀑」の字は「たき」とも「しぶき」とも読む。仕事場の眼の前で、日に何度も激しく流れを変え、かつて源平の合戦の場となった激しい海流・関門海峡を常に目にしていた中で、その作品や感性が「水」の如くどんな形にもなることをも望み、この文字を選んだのではなかろうか。本人の中に轟轟と流れ落ちる「瀑布」のような激しさがなかったはずはない。作品の切れ味の鋭い文章やテーマにも「激しさ」があり、「厳しさ」の点では、これほどに己を厳しく律した作家を私は知らない。

赤江の多才さは幅広い作品群だけではなく、「書」にも垣間見ることができる。今も、故郷・下関で遠来の友人と盃を傾けた店で見ることができるが、繊細と雄渾が入り交じり、作品の大小を問わず他の作家の書にはない個性が感じられる。晩年には、部数は少ないものの、すべて「肉筆」の豆本を作成したことがあったが、これも、作品だけではなく独特の書体をも併せて愛するファンが多かったからだろ

う。

晩年に近い数年間、作品の発表が極端に少ない時期があった。長年助手を務めておられた浅井仁志氏の話によれば、ほとんどの原稿依頼を断り、書きたいテーマと闘っていたのだという。それは、能楽の大成者として知られる「世阿弥」だった。「世阿弥が書かせてくれないんだ!」と、その苦悩を漏らしたこともあったそう。時には仕事場に面した下関の海へ飛び込み、得意の水泳で気を鎮めもした。残念ながら「世阿弥」をモチーフにした作品が世に出ることはなかった。

「美しいものを書くこと」しか頭の中になかった赤江瀑は、2012年6月8日、自宅で心不全により79歳の生涯を突然に終えた。訃報に接した時、もう新しい作品が読めない寂しさと、他の誰にも書き得ぬ「美の世界」すべてを持って逝ってしまった喪失感に襲われた。

「耽美」の誤解

「耽美」とは「美を最高の価値とし、美のみに魅了される」ことが、第一義とされている。範囲を広げれば「道徳や倫理から逸脱しても、美を追い求めるもの」となる。赤江が精力的に作品を発表していた1970年代は、「耽美」の定義や理解が現在よりも遥かに浅かったことに注意が必要だ。自身は「僕は、耽美小説は書かない」と語ったと聞いたが、確





『薔薇の白毫』。詩を肉筆で認めた豆本で、限定20部のみが作られ、オークションで頒布された



「朦朧たる静謐がやってくる」。赤江美学を凝縮した言葉だ



敬愛するコクトーの言葉を好んで色紙に認めた

かにその範囲の広さは「耽美」と一括りにはできないだろう。「官能小説」とはもはや死語だが、こうした小説群が盛んに読まれていた時期とも重なり、『問題小説』、『小説宝石』など、そうした作品を多く掲載している月刊小説誌に作品が掲載されていたことから、当時の感覚がわかる。

しかし、彼が追い求めたのはそうしたものではない。鍛え上げられた日本刀の刀身の「反り」に、あるいは素晴らしい能面を打つ職人の感性に、肉体の限界まで跳躍しようとするバレエダンサーに、闇の中で芳香を放つ日本庭園の妖しい香りに「美」を感じれば、作品のテーマになる。「ギリギリの限界まで美しいもの」、場合によっては「命の瀬戸際の美」を追い求めた赤江には、それがたとえ男性同士の性愛でも問題にはならない。ただ、通り一遍の読み方で誤解されたケースも少なくはない。しかし、仮にそうした匂いを感じる作品でも、雑誌に掲載された短編が単行本として一冊の本にまとまった折に、発表時とは全く違った香気が立ちのぼる。読んでいて嫌らしさを感じないことが、「僕は耽美は書かない」との意味であり結果なのだ。

赤江瀑の「美毒」

2001年に講談社から刊行された短編撰集『虚空のランチ』のカバーに、赤江が自らの世界観を「僕の青山」として記しているのが、引用する。

「(略) 僕には僕にしか仰ぎ見れない虚空があって、それは秘匿の虚空であって、虚空は僕の獵場であって、僕の小説は、とりもおさずそこから狩りとってくる獲物のようなものである。したがって虚空、そこにはあまねく実りの気配に満ち満ちた、血肉の息吹き滾滾と涌く、言わば僕の青山ともよべる眺めを持っている所でなければならない(後略)」。

赤江が「虚空」と呼ぶ「狩り場」には、先に挙げた日本の伝統文化に加え、深淵たる闇の世界が広がっているのだろう。その味わいが「美毒」となって読者を蠱惑するのだ。能筆で、書家としても独自の味わいを持つ書を遺した赤江は、フランスの作家、ジャン・コクトー(1889～1963)の『美は速やかに緩やかに行く』の言葉を好んで認めた。

赤江作品から、甘やかで美しい「毒」が匂い立っているのは、この感覚が作品に投影されているからに他ならない。

綺羅錦繡の「ことば」

「迷い雪が一ひら二ひら戯れかかっては簾の上で溶けるさまは、まるで亡き人へ慕い寄り雪のあやかしかとも、茜には思われた」「いきなり、墨の匂いが、^{めさき}眼先をよぎった」「あどけなさ^{せいひつ}と強壮さが、端正で淫猥な花々しさが、静謐で騒然としたのびやかな裸体の上に、^{せつかとむらいざ}みちみちていた」(『雪華葬刺し』より)。

「昔日、野の気魄にあふれて修練の汗を吸ったで



あろう常稽古の芝居小屋も、重い門の木戸をとぎして、朽ち果てるにまかされていた」「まだ薄闇のなごりがただよっている、そこかしこ明けきらない場内だった」「爛熟した、力^{つよ}強い、今を盛りの申し分ない肉体であった」(『美神^{びしん}たちの黄泉^{よみ}』より)。

簡単に言えば美文調だが、無数の言葉から選りに選った「ことば」が紡がれ、文章に編まれている。後は、「ご一読を」と申し上げるすべしか持たないのは、物書きとして恥ずかしい限りだ。

小説は二次元の文章で描かれた世界を、読者が頭で三次元化する喜びがある。作品が醸し出す特殊な世界観は、映像や舞台などの違った形で観客に見せたいとの想いが沸き上がる作品でもある。しかし、赤江は「僕の作品はなかなか映像や舞台にはなりにくい」と語っていた。それでも何本か、映像化、舞台化されたが、いずれも残念ながら原作を超える、あるいは新たな世界を見せるには至らなかった。

これは単に映像や舞台の出来が悪いという問題ではない。活字が三次元以上のイマジネーションを与える力を持つということだ。先ほど、いくつかの文

章を引用したが、その場の空気感、温度、明るさ、匂いなど我々の五感に直接響く文章を超える表現は至難の業だ。

恥を曝すことになるが、昨年11月、東京・下北沢の小劇場で能楽の世界を舞台にした『阿修羅花伝』を私が舞台用の脚本に直し、7人の俳優で「読み芝居」とし、朗読と演技を併せて上演した。浅井氏からの快い許可で臨んだのはよいが、活字の世界を三次元で「見せ、聴かせる」難しさに、腸が捻じれる想いをした。活字を読み、その連なりで表現する美しさを、生身の俳優の肉声で聴かせた時に、受け手の感覚は大きく変わる。

最初に『阿修羅花伝』を朗読で素読みした時、2時間近くを要した。朗読劇で2時間は観客の負担が大きい。発案者の私が原作をカットしたものの、演出よりもこの作業が大変だった。何度読み返しても、削る場所がない。何気ないやり取りが後の伏線になっていたり、言葉の表現を変えて繰り返すことの効果も大きく、緻密に組まれたパズルのような構成なのだ。苦しんだ末に1時間15分にまで削ったが、



装丁などに好んで使われた鉛筆画家・建石修志氏の作品



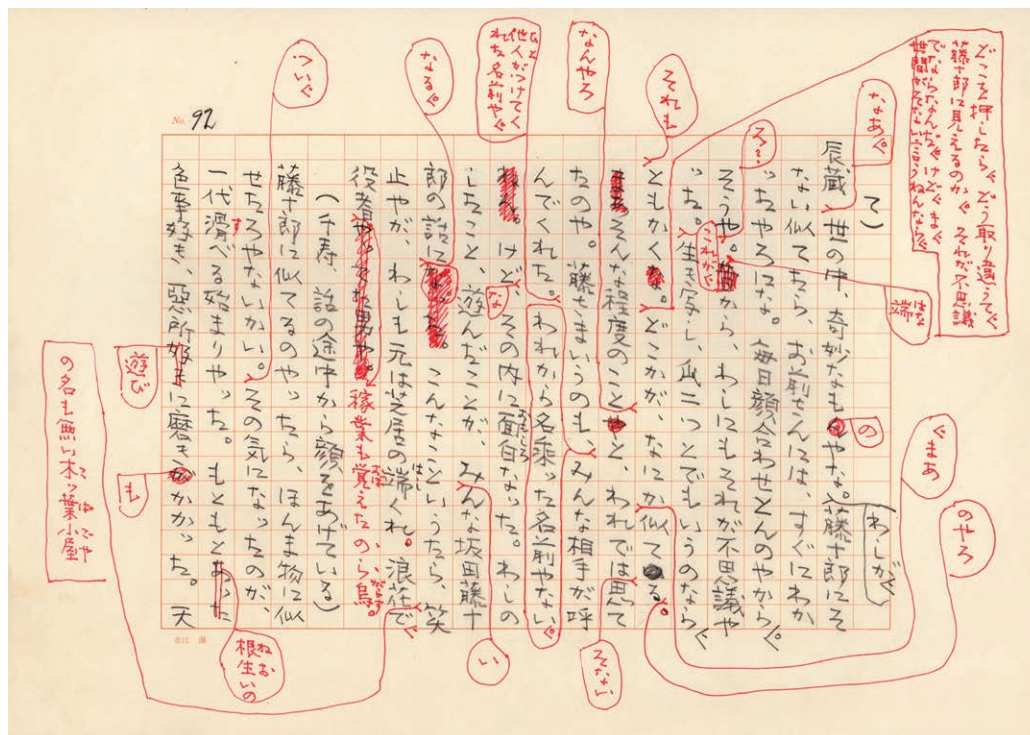
この表紙の装丁画も建石修志氏の作

実際に作品を「いじる」作業を体験して、作品の精巧さを体感した。

赤江の「耽美」は、美しい世界の中にある「華」や「毒」に耽溺し、惑溺しながら紡ぐ地道で苦しい作業だ。かつて、俳優の平幹二郎が言った。「中村さん、我々俳優の仕事は、泥沼の水面で咲く蓮の花を見ていただくもので、泥沼の中で藻掻く苦しみをお見せし、ことごとしく語りたくはないんです」と。赤江瀑は、美しくも醜くもまとわりつく言葉の泥沼



2021年11月、『阿修羅花伝』公演時のパンフレット



作者の闘いと苦悩の跡が生々しい

赤江瀑 の世界

戦後10年 美毒の人

の中から、輝き匂い立つ物だけを丹念に掬い上げて一篇の作品を紡ぐことに生涯を費やしたのだ。

赤江作品には珍しい戯曲『夜の藤十郎』は、自らの小説を劇化し、上演したものだ。私も上演の折に少しばかり関わったが、写真が示すように、鉛筆の手書き原稿にたくさんの「朱」が入れられている。これは上演前の推敲段階の原稿ではない。上演後、再演の予定があったわけではなくとも、納得できない部分に最晩年まで手を入れ続けていたものだ。

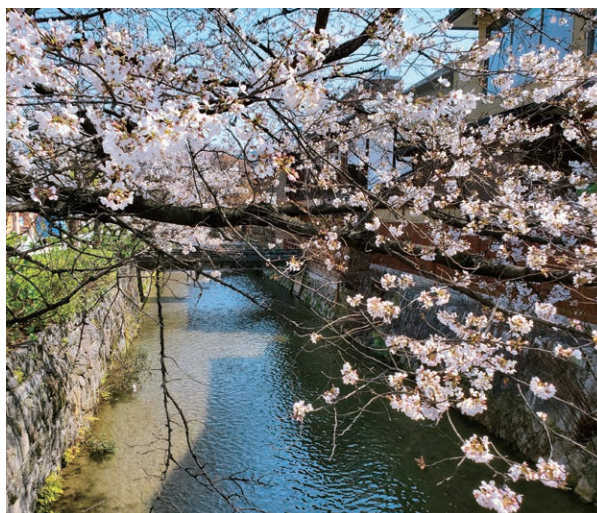
赤江と京都、そして「闇」

言うまでもなく「京都」は世界に冠たる観光地の一つで、神社仏閣をはじめ見どころには事欠かない。赤江作品には、京都を舞台にしたものや京都の人物が登場する作品が多い。なぜ京都にこだわるのだろうか。一つには、赤江が終生追い続け、魅了された「日本の伝統文化」の集積地であり、題材に事欠かなかったからだろう。自らの「宇宙」を表現する素材に満ち溢れた土地へ足を運び、素材を集め、ディテールを確かめ、いろいろな匂いを嗅いだことは想像に難くない。

しかし、私はもう一つ、重要な理由があるのではないかと推測している。京都という街は、よく言われるように他者をなかなか受け入れない排他性・閉鎖性を持っている。だからこそ、限られた狭い土地の中で、さまざまな文化を連綿と継承することができたのだ。また「京都人の本音はわからない」と言われるように、他人には伺い知ることのできない「深い闇」を抱えた土地でもある。赤江は、京都が千年の歳月を^{けみ}闊してなお抱えている「闇」に魅せられたのではなかろうか。「闇」に光を当て、そこに蠢く魑魅魍魎の姿を、綺羅のような文章で描き出し、自身が感じる京都の息遣いを炙り出そうとした。

私がこう考えるのは、京都を扱った作品の中に得体の知れない「闇」の気配を感じるからだ。また、赤江が京都の花街で発行されている雑誌からの原稿依頼にひどく喜んだというエピソードもそれを裏付けている。

赤江は、京都が抱えている「果てしない闇」に棲む眷属の一員と認められたことが何よりも嬉しかったのではないだろうか。燦燦と陽の当たる風光明媚な京の景物ばかりではなく、闇に蠢く京の姿や人々の息遣いを描いてこそ、京都を題材にした作品を書く意味があったのだと思う。闇が深ければ深いほど、



高瀬川の桜は京都の昼をよく映している



『花曝れ首』にも登場するあだし野念仏寺^{ねんぶつじ}。闇を迎えようとしている



「心形静か」。絶筆にふさわしいと言うべきか（個人蔵）

陽光の煌めきは美しくなる。

勝手に選ぶベスト10

皆川博子、森真沙子、篠田節子^{ひがし}、東雅夫、恩田陸、近藤史恵^{ふみえ}…現役の第一線で活躍を続けている作家たちにも、赤江の美毒に影響を受けている人は多い。こうした人々が作家ではなく「読者」としてのベストをいくつか挙げている座談会などもあり、今から30年ほど前、盛んに赤江作品が読まれていた頃は、

若い読者を中心にインターネット上に多くのウェブサイトが作られ、ファンによるベスト作品が選ばれていた。そのひそみに倣うわけではないが、これから赤江瀑の美毒の扉を開けようとする読者のために勝手に選んだ中村版・ベストを挙げておこう。新しい世界への誘いになれば幸いである。番号は便宜上で作品の優劣ではない。

- ①『花曝れ首』
- ②『雪華葬刺し』
- ③『霧ホテル』
- ④『弄月記』^{ろうげつき}
- ⑤『獣林寺妖変』^{じゅうりんじようへん}
- ⑥『阿修羅花伝』
- ⑦『夜市』^{よいち}

まだ他にも紹介したい作品はたくさんあるが、これだけを選び出すのにも相当の時間がかかった。本来であればベスト10とでもすべきだが、残りの3つは読者の皆さんに埋めていただくこととしよう。本や作家、作品との一期一会の邂逅もまた、人生の楽しみの一つなのだから。幸い、最近、赤江瀑作品の復刊が続いている。2020年には河出書房新社から『赤江瀑の世界』が刊行され、ゆかりの人々がエッセイを寄せ、何篇かの小説も掲載されている他、創元推理文庫からは新たに編まれた赤江のアンソロジー『赤江瀑 アラベスク』が全3巻にわたって刊行された。新たな世代、新たな読者に、赤江瀑の世界を楽しんでいただくきっかけになれば幸いである。

